秋なすびわさゝのかすに漬けまぜて棚におくともよめにくはすな、といへるも、鼠をよめといふあかしなり、また季吟が師走の月といふ俳書に、

月の鼠よめ入りするやむこの山、といふ句あり、これにつきて滑稽の一話あり、荻生徂徠ある人にいへるは、われかつてより讀書に心をひそめ、和漢ともに表紙のつきたらん書によまざる、といふものなし、およそ世にしれぬといふことはなきものをと、廣言いはれしかば、その人云、さらば鼠のよめ入りといふ冊子に、道具持の宰領につきたる侍の鼠の名を棚渡仲右衞門といふ名あり、かゝることにも據のあることにやと問ひけるに、されば、とよ、そはどぶ鼠の仲間が出世して、足輕になりたるにて、抱朴子内篇に、鼠壽三百歳、滿三百歳則色白、善憑人而下、名曰仲、といふことあり、その侍鼠も年へしからに、名をば仲とよべるなりと、こたへられしに、ある人もその博識に服せしとかや、

〔先哲叢談六〕物茂卿

大岡忠相越前守曰、聞徂徠博識洽聞、無所不知、余將試問以躓其答、乃招問曰、世有鼠婚之說、何謂也、徂徠答曰、事出於其年某人所著一小說也、乃其書所載鼠類之眷屬名姓、矢口縷縷如注、忠相始服其彊記、

〔西遊記續編三〕鼠島

肥後と天草の島との間に海中に小き島あり、いかなることにや、此島には鼠むかしよりおびただしく住るとぞ、元より小き島なれば人も住ず、此鼠のみなりといふ、此故に此海を通ふ船にては、三味線をひくことを、船頭かたく留めて赦さず、若此邊にて此禁を用ひず三味線を彈ば、かならず波風大きに起りて船危き事あり、三味線は猫の皮にて張たるものなれば、鼠のいむ故也とぞ、都方にては近きころの價の安き三味線は、唯狗子皮にて張事なり、此島の鼠はむかしよりの